

【講演と鼎談】

『アジアの中の日本と豪州・共生を考える』

地球共生学部は 2016 年 5 月 11 日に「地球共生学」講義の一環としてオーストラリア大使館のトレバー・ホロウエイ参事官を迎え、アジアの中での日本とオーストラリアというテーマで講演していただいた。講演の後、参事官と福島亜紀子教授、会田弘継教授による鼎談も行って議論を深め、学生との質疑応答を行った。日本とオーストラリアは核軍縮や平和維持活動、自由貿易の推進などで共通の利害を持ち、協力しあうことが多い。21 世紀の「アジア」をより広く、環インド洋から環太平洋を包含するかたちで考えていくとき、オーストラリアという国の大切さに気付くことになるはずだ。

日時：2016 年 5 月 11 日 午前 9 時～10 時半

場所：E 棟 201 号室

〔講演〕

講演者：在日オーストラリア大使館参事官 Trevor Holloway / トレバー・ホロウエイ

皆さま、こんにちは。ご紹介に預かりました駐日オーストラリア大使館の参事官トレバー・ホロウエイです。福島教授、平澤学部長、ご招待とご紹介をありがとうございます。この素敵なキャンパスに来て、そして地球社会共生学部の皆さんと会って、とてもうれしいです。本日は、「アジアの中のオーストラリアと日本」というテーマの講演をさせていただきます。そして、私の世界観の一部を述べたいと思います。

南半球の国、オーストラリア、の視点から日本をどのようにみるか、日本のアジアのなかの立場・存在をどのように解釈するか、ということに触れてみたいと思います。地球社会共生学を学んでいることを考えると、みなさんの中には、おそらく国際関係の仕事に興味を持っている人が多いのではないかと思います。

従って、皆さんにひとことおすすめします。それは、自分自身の世界観、世界についての視点と考え方、を持って、深めていくことです。

外交政策の大きなテーマ、つまり利益、力、影響力、そして価値観はどの様に共生するでしょう？ 私のこのアジア地域に関する世界観の一部は次のとおりです。

オーストラリアと日本がこの地域の“お似合い”のパートナーであるということです。その基盤は、極めて高い経済補完性と共通価値観です。そして、将来に日本とオーストラリアは共通価値観を持つこの地域のほかの国々ともっと幅広く協力していくと思います。われわれの今後の繁栄は国際秩序へのコミットメントに基づいてこの地域の平和と共生関係を維持することにかかっています。日本は“積極的平和主義”により、この地域の平和、安定と繁栄に積極的に貢献しています。そしてアメリカはこの地域の平和と発展に、不可欠な役割を果たしています。というような世界観を持っています。

質疑応答の時間に是非反対の声を上げてください。

さて、始めに私のこれまでの経緯を簡単にご説明したいと思います。私は日本と出会い、縁を持ってから、36年が経ちました。日本という国の存在が始めて知り、そして関心を持つようになったのは、7歳の頃でした。当時、通っていた小学校の ham radio club, つまりアマチュア無線部活に参加していました。学校の屋根に 5m のアンテナと、調整するダイヤルとノブがついた無線機を設置していて、世界中の小学校と通信ができました。

今は誰とでも、どこでも、いつでも communication できるのが当たり前となっています。しかし、30年前は、他の国に住んでいる人と communication をとることはとてもまれで、難しいことでした。携帯や email はもちろんなかったし、

国際電話もすごいことでした。

話は戻りますが、ある日、その ham radio（アマチュア無線）で鎌倉の小学校と連絡を取りました。その無線を通して私は初めて日本人と会話することができました。とても簡単な会話でしたが、いまでもはっきり覚えています。「日本には鳥がありますか」、とか、「毎日何を食べていますか」などなど。この世の中に自分と違う生活をしている人々がいるんだと感じた瞬間でした。

その後、その鎌倉小学校の生徒の一人とペンフレンドとなり、よく手紙を交換しました。それを通して日本人の生活様式が少しずつ分かりました。そしてオーストラリア以外の国際情勢に興味を持つようになりました。

大学に入った時も法学以外に海外と接触できる科目も選びたかったので、日本語と韓国語の科目をとることにしました。その上、大学の部活として、大学の日本クラブに入会して、様々な日本文化と関わりのある活動に参加しました。その日本クラブの他のメンバーは私と同じように日本に興味のある大学生で、すぐ仲良くなりました。振り返って見ますと、当時仲良くなった友達が今でも一生の友人です。皆さん、青山学院で知り合う友達も一生の友人になるでしょう。

大学一年の夏休みに、18歳のとき、友達6人と初めて日本を訪問して、日本の魅力に触れました。でも日本語が下手でほとんど通じなく、もっと話せたら communication ができたのにと残念に思いました。おかげで、もっと日本語を話せるようになろうと決心しました。

その次の一年間、大学に通いながら一生懸命アルバイトをして（ピザ屋さんでピザ配達のアパートでしたが）、一生懸命お金をためました。そして19歳の時、また日本に来て、東京に一年間留学しました。

ホームステイ先のお母さんが俳句の先生で、俳句とか、短歌、書道など、日本の文化と人々が持つ視点や現実、心について学びました。その後、オーストラリアに大学に戻り、数年後また日本に戻って来ました。第三回の来日でした。川崎市役所に二年間勤めて、日本の職場制度や日本の文化についてさらに勉強を進めました。例えば、日本点字図書館でボランティア活動と同時に日本語の

点字を覚えました。その時、将来に日本と関係がある仕事に就きたいなと思い始めました。

そして、またオーストラリアに戻り、大学卒業後に目指した道は外交でした。しかしながら、オーストラリア外務貿易省に入省してから、アジア全体を考えるとやはり中国のことを理解する必要があることに気が付きました。そのため、通算で10年間、中国に焦点を合わせたキャリアを積むことになりました。中国語を勉強して、駐北京オーストラリア大使館に二回派遣されて、色々な分野で中国との関係に携わりました。そして二年前にオーストラリア外務貿易省の日本課長に任命されました。日豪関係の政治、経済、戦略といった面の政策の責任者として毎日二国関係を深めようとしてしました。そして今年の一月から駐日オーストラリア大使館に派遣されました。

初めて来日してから30年近くです。いま振り返って見ると本当に長い道だと感じます。

さて、オーストラリアと聞いて、みなさん、どんなイメージが浮かぶでしょうか。カンガルーやコアラ、または砂漠やビーチなどの壮大な自然、アボリジニの文化、または12月のクリスマスは暑い季節であるといったことでしょうか。

面積は日本の20倍もありますが、人口は5分の1です。首都はシドニーではなく、キャンベラです。先ほどもうしましたカンガルーは人より多く、6,000万頭もいます。

ここで皆さんに質問です。世界のどこの国が一番住みやすいでしょう？

答えは、残念ながら、ノルウェーです。でもオーストラリアは二番目。国連が発表している国民生活の豊かさランキング、「人間開発指数」では、オーストラリアはノルウェーに次いで、世界で二番目に豊かだと評価されました。他に『エコノミスト』というイギリスの経済誌では、オーストラリアの2番目大きい都市、メルボルン市、が、5年連続世界で最も住みやすい都市と評価を受けました。

オーストラリアは、非常に多様性に富む国です。アボリジニやトレス海峡の

人々といった先住民に加えて、外国で生まれて、その後オーストラリア国籍を取った人々も非常に多くいます。国民の4人に1人は、外国で生まれた人々で、国民のルーツを辿ると、200以上の国が関係しています。現在、経済成長率は24年間連続でプラスです。こうした経済記録は先進国の中ではオーストラリアだけです。

様々な文化を持った人々が一緒に暮らしていくために、オーストラリアの国民と政府は、民主主義や自由、法による支配、人権、平和的共存（きょうぞん）といった価値観を大切にしています。この共通価値観、民主主義や自由、法による支配、人権、平和的共存が日豪関係の基盤の一つとなっています。オーストラリアと日本は、長年に渡って政治や経済、草の根交流を通じて友情を育ってきました。

オーストラリアと日本は第二次世界大戦後、1951年に国交が正常化しました。1957年には日豪通商協定という約束が交わされ、お互いに貿易が活発になりました。この協定によって、オーストラリアからは、石炭、天然ガス、鉄鉱石、そして日本からは工業製品の輸出がされて、両国は発展していきました。その結果、40年以上にわたって、日本はオーストラリアにとって最大の輸出市場となりました。

現在、日本はオーストラリアにとって、世界第2の貿易相手国です。そしてオーストラリアは日本の最大のエネルギー供給国です。日本の建物、橋、道路、電車などなどの半分以上はオーストラリアの鉄鉱石と石炭によって作られたものです。

日本とオーストラリアは人と人との交流も盛んです。一般オーストラリアの人は日本に対してとても温かい、友好的そして積極的なイメージを持っています。日本語はとても人気のある言語で、オーストラリアで一番多く学ばれている外国語です。30万人のオーストラリア人が日本語を勉強しています。その中に私のめいとおいも入っています。そして、108の姉妹都市が長年友好を深めています。650の姉妹学校の連携もあります。先ほど申しました様に、日豪の関係が深い大きな理由は、共通の価値観、国益や関心に基づいています。

現在、世界経済の中で中国やインドを始め、アジアが最も活力があり、成長を続けています。それに伴って地域情勢は、大きく速く変化しています。オーストラリアは、アジアより広く、「インド太平洋地域」というインド洋から太平洋にかけての地域に目を向けています。このインド太平洋地域の国には、もちろん日本とオーストラリアも含まれます。

古い時代には、アジアの地域では、中国から中東、果てはオーストラリア大陸の北端に至るまで、数百年間にわたって交易活動が行われてきました。その後、ヨーロッパで産業革命が起こり、通商活動は欧米に移りました。現在は、改めてアジア各国の存在が大きくなっており、インド太平洋地域が貿易や交通の中心となっています。この地域は、日豪にとって経済活動と安全保障の観点からとても重要です。

さて、日豪関係の重要な柱には、安全保障や戦略・防衛分野の関係もあります。先ほど申しました変わりつつあるインド太平洋地域を見ると、中国やインドを含めて地域のパワーバランスが変化してきています。その時代の中で、各国が国際法をきちんと守っていくことは大切です。

また、特に日豪にとって、インド洋や太平洋などの海で、船の移動の自由を確保することは重要です。こうした課題が出てきていることから、日豪は、近年、戦略・防衛分野の関係を発展させています。オーストラリアは日本の二番目に重要な防衛パートナーです。もちろんアメリカに次いでです。2007年から、両国の外務と防衛大臣の4名が話し合う、外務・防衛閣僚協議、2+2を始めました。2+2では、地域情勢について意見を交換したり、防衛に関する連携について話し合ったりします。この流れで、日本の自衛隊とオーストラリア軍の連携の度合いも深まっています。

たとえば、2013年のフィリピンでの台風被害の際、日豪は両国間の協定を活用して共同支援をしました。そして、この写真で写っているように、去年Vanuatuの台風被害の際、また共同支援をしました。アフリカにも、南スーダンでは、オーストラリア国防軍と、国連ミッションに派遣された自衛隊とともに、国家の建設や開発を進める支援も行っています。

また、日豪にとって共通の価値観を分かち合っているアメリカは強力なパートナーです。東シナ海や南シナ海での船の移動や飛行の自由といった海洋安全保障問題の関心も共有しています。

今日は皆さんにアジアの中のオーストラリアと日本について簡単に話しました。オーストラリアと日本はこの地域の“お似合い”のパートナーです。そして、このパートナーシップの基盤は極めて高い経済補完性と共通価値観です。

私が30数年前小学生としてアマチュア無線で日本と連絡を取ったその一歩がここまで来ると想像もつきませんでした。皆さんがこれからたどる道のひとつとして、オーストラリアとの関係の一步を踏み出していただくことをぜひお勧めします。そして、今日の講演が、皆さんが自分自身の世界観を深めるための糧（かて）となれば幸いです。

長い間、ご清聴をありがとうございます。

[鼎談]

鼎談者：

Trevor Holloway／トレバー・ホロウエイ

Akiko (Kiki) Fukushima／福島 安紀子 地球社会共生学部 教授

Hirotsugu (Hiro) Aida／会田 弘継 地球社会共生学部 教授 (Hiro)

FUKUSHIMA: Now, having heard your lecture, we would like to expand and deepen some of the points you have raised in your lecture in this panel. In order to warm up our panel conversation, Hiro, can you share with us your experience with Australia.

AIDA: Okay. Well, I don't have much experience with Australia per se but rather with Australians. I have a pretty good and interesting experience with Australians when I was based in Geneva, in Tokyo also and in Washington DC. , particularly when I was in Geneva as a correspondent reporting about trade matters at the end of the Uruguay Round of trade talks, which was the global trade talks that lasted about seven years from 1987 to 1994, as I remember. Actually, the start of the WTO ---the World Trade

Organization--- was in 1995, so in the previous year the negotiation was concluded.

There, Australians played a very important role as a member of the Cairns Group. The Cairns Group is a group of agricultural exporting countries. But anyway, those are a little bit complicated things.

I was more impressed by one Australian diplomat whose name is Richard Starr, who was an ambassador to the Conference on Disarmament. You know what disarmament is, right? Making the country free of arms for a better world. Well, there is U.N. Conference on Disarmament in Geneva and there was a very active ambassador there at the time of the negotiations on very important nuclear issues such as the Non-Proliferation Treaty and Comprehensive Test Ban Treaty.

Anyway, to be short, the Australians and Japanese have two common agenda issues. One is anti-nuclear policy. We have been working together on it, Australians and Japanese, over the last four or five decades, I think. The other thing is trade issues. Although we are an agricultural importer and they are an exporter of agricultural products, and there seems to be some friction between us, still we have cooperated together over the last couple of decades on how to make this region more prosperous.

You know that APEC, Asia-Pacific Economic Cooperation, it is a kind of framework of cooperation, not only in Asia but also including the eastern rim of the Pacific Ocean, that is the US, Canada, and the Latin American countries. We Japanese and Australians spearheaded cooperation in this regional framework to make this area or region more prosperous together.

So those are the things we have been doing together over the last couple of decades and we have succeeded in a way. So we have a lot of things to talk about together from now on, including those things.

FUKUSHIMA: Thank you, Hiro. I think you picked up two important issues, which I would like to expand upon, if I may. Trevor, you have stressed the fact that Japan and Australia are “natural partners.” From that perspective, I would like to pick up two points you have raised. One is nuclear disarmament, and the second is trade issues

including Asia Pacific regional architectures for cooperation such as APEC.

Let me start off from nuclear disarmament. We have learned the news that President Obama has decided to visit Hiroshima after his participation in the G7 Summit to be held in Ise-Shima. Well, he has been campaigning on a nuclear-free world. Meanwhile I believe Australia and Japan have been working on a more realistic approach to nuclear disarmament and our friends like Mr. Gareth Evans and former Foreign Minister Yoriko Kawaguchi have spearheaded our efforts for nuclear disarmament.

Trevor, I think our incumbent foreign ministers are making efforts to push this nuclear disarmament as well. Would you like to expand on it and how we can develop these initiatives for a better world, not only for the two of us, not only for Asia, but for beyond?

HOLLOWAY: Thank you, Kiki and Hiro. I think nuclear disarmament is a perfect example of the Australia-Japan partnership, and it's an example where the two of us are leading an issue globally. It's an example of how we can combine bilateralism, Australia and Japan; regionalism, what we are doing in our Asia-Pacific region; and multilateralism, bringing the rest of the world into this discussion, in a very effective way.

Our two governments have for a long time been committed to the principle of nuclear disarmament and have worked hand-in-hand over many years to try and advance that discussion. And certainly, the US president's decision to visit Hiroshima is a large step forward in that area.

I think that it also shows, if I may, the model for others in the region and others in the world. They are looking at how these decisions are made and how these issues are advanced, and I think one day all of you here will be involved in making those decisions. These are decisions that people make, officials make, individuals make, and they propose and they push forward, and they find partners like Australia and Japan to try and work together.

This is not an automatic process that just happens. It takes people that have the ideas, the partnerships, the friendships, and it's based very much on our common values and our common national interests.

FUKUSHIMA: Values, which you emphasized in your lecture, is a very important parameter for us to promote cooperation, be it for bilateral or multilateral. For nuclear disarmament, views vary, but Australia and Japan do share a similar view and if we can create, how should I say, a kind of critical group for nuclear disarmament.

I have researched on multilateralism for the past two decades and believe that multilateralism is a difficult game to play. Bilateral negotiation is easier in a way because your partner would listen to you anyway, but in multilateralism, unless you have a skill and attractiveness to put others on board, you won't be able to make things happen. So in that sense, Australia and Japan have worked together for Asia-Pacific, and hopefully for Indo-Pacific in the future, and one example might be APEC and another example might be EAS, or the East Asia Summit.

Hiro, do you have anything to point out regarding our common initiative on APEC that you have alluded to in your initial remark?

AIDA: Well, before going into that little bit abstract issue of values, I just want to go back to this nuclear issue and why Australians are so interested in nuclear disarmament. I think our students should know about it.

As I understand it, Australians have had a very difficult time with nuclear weapons in terms of nuclear weapons testing in Australia and the South Pacific Ocean. Maybe Trevor will be able to explain to you how Australians have got into this nuclear disarmament movement. It's not only the people but the government itself is getting actively involved in this nuclear disarmament issue.

So it is based upon the really concrete experience of Australians. We have had our own experience with the Hiroshima and Nagasaki bombings, but the Australians, they have had, in a way, a similar kind of experience with nuclear weapons, and I think Trevor is going to explain that to us.

FUKUSHIMA: Trevor, Hiro in a way has represented your country, Australia, and explained why Australia has come to take this position on nuclear disarmament, but I would appreciate it if we can hear from your own perspective and elaborate on why Australia is taking this position.

HOLLOWAY: For Australia, and for all of us, we've all prospered over the last 70 years. If you went back 70 years and looked at the average Australian person's standard of living, the average Japanese person's standard of living, and where we are now, it's an entirely unrecognizable, higher standard of living that we enjoy.

And our economic prosperity and development in Australia and Japan, and the rest of the region, has really relied on regional strategic stability for 70 years and that has been the difference.

A large part of that is the strategic security guarantee that America has provided our region and this has allowed all of us just to get on with developing our economies, increasing our standards of living, giving our citizens a quality education, and letting citizens get good jobs and find prosperous futures.

So for Australia and Japan, we want to ensure that there is continued regional strategic stability. It's in no one's interest for us to have regional instability so we look at a range of different areas on how we can increase economic opportunities and how we can reduce strategic risk. And one of those strategic risks is proliferation of weapons of mass destruction and so the nonproliferation debate is something we've been very focused on as one of those risks and strategic risks that we can reduce.

Australia's own personal experience in the 1950s included a number of nuclear weapon tests conducted in Australia. We are a very old country with not many people in many parts of the country and so it was seen as a very suitable place to test nuclear weapons.

And then in the 1970s and 80s and 90s, some countries were testing nuclear weapons in our region, in the Pacific region, which really caused a lot of anguish and anger in Australia.

So we want to maximize our economic opportunities and reduce our strategic risks, and that's the basis on which all of us have prospered over the last 70 years.

AIDA: In responding to the original question from Kiki about new initiatives, for example the Indo-Pacific idea, this kind of concept is a future agenda for Australia and Japan. We have been talking a lot about the so-called Pacific Rim area, or the Asia-Pacific region.

Now, with an Australian initiative, the world is looking at the so-called Indo-Pacific region. It is an amalgam of the Asia-Pacific and Indian Ocean regions. This huge area should be more prosperous with a new corporation framework and that's what the Australians are looking at and the Japanese are also now very much interested in because it would include an Eastern African region which would be also a more prosperous area in coming decades, just as Asia-Pacific is getting now.

So that's a kind of new initiative started by the Australians as Australia is just located there at a kind of hinge between the Asia-Pacific and Indian Ocean areas. So that's a new initiative spearheaded by the Australians and we, Japanese, are now joining that. That's the situation we are now in. It's really a great idea and this should be a very prosperous and also peaceful area for the sake of the world's prosperity.

FUKUSHIMA: Thank you, Hiro. I trust we started to use the phrase “Indo-Pacific” rather than “Asia-Pacific” in our geo-political discussion. In my case, from the perspective of maritime security, as Hiro mentioned, the Japanese SDF is now in the Gulf of Aden, close to the Horn of Africa, with the operating center in Djibouti working on piracy control off the coast of Somalia, and it is, of course, connected to the Indian Ocean and then to the Pacific.

So from the maritime security perspective, as well as economic interconnectedness, I think it is necessary for us to look at the region as Indo-Pacific, but it has many components to it and depending on the topic we may need to network in a various manner.

But having said that, I really appreciated Trevor's point about maritime

security, in particular in the East China Sea and the South China Sea. We have assertive actions taken by a country right next to us, we cannot move away from the region, and we have a country who is testing nuclear missiles. I concur with you that we should try to respect the international rules of law.

Do you have any ideas, private suggestions, for us, Australia and Japan, to work together for maritime security in the region? That's my first question and then I would like to move on to trade.

HOLLOWAY: For Australia, why are we interested in what happens in the South China Sea? Why are we interested in what happens in the East China Sea? There are two reasons. One is 70% of Australian trade passes through that region so we have a very big economic interest in ensuring that there is continued freedom of navigation and freedom of commerce in the region. The second is more a rules-based approach. We think that any disputes should be resolved peacefully in accordance with international laws and international norms.

So those are the key reasons why we have an interest. We don't take a position on the merits of the particular disputes, but we do think how countries can interact needs to be on the basis of something; otherwise, you have a big country/small country power imbalance. The best way to do that is to have an international rules-based system where countries abide by the decisions that are made and abide by the rules rather than a power imbalance.

KIKI: Thank you. Hiro, can we move on to economic issues? Would you like to raise a point from your perspective?

AIDA: I would like to say these two issues are interconnected. As he said, it's a concern of what's happening in the East China Sea and South China Sea, those are really a concern for us. Why? Because it causes trouble in our freedom of navigation, and freedom of navigation is really the basis of our free trade, which means in turn our prosperity. When we talk about trade and prosperity, we should talk about freedom of navigation and we should talk about what's going on in the East China Sea and South

China Sea.

And it's not only there. As Kiki said, we should talk about what's going on in the Eastern Horn of Africa region and the also in the Malacca Strait. Those are really key points of world trade and freedom of navigation for seafarers. Those issues are really interconnected and we should discuss those things as an integrated issue.

FUKUSHIMA: Thank you. Let me go back to the original topic of today's lecture, "アジアの中の日本とオーストラリア", "Japan and Australia in Asia", and as Dean Hirasawa said, students will study in Thailand or Malaysia for half a year. So here I would like to discuss with both of you what Australia and Japan can do together for Asia, situated like the bookends of Asia.

I think we should be proud of the fact that we took initiatives jointly in launching PBEC, PECC, and then APEC, and we have been successful in asking Australia to join the East Asia Summit (EAS), which started as ASEAN+3 and then expanded to the East Asia Summit. And by having the two of us sharing many thoughts together, we can work for peace, stability, and prosperity in Asia, which will bring a benefit for each of us as well. So you work for somebody else but the boomerang comes back to you, that is the kind of an idea I would like to explore for the remaining time. Trevor, do you have any ideas?

HOLLOWAY: Japan has played a very, very positive role in the Asia-Pacific region for the last 70 years. Japanese investment has had a major impact on the countries you will go and study in, in Thailand in particular, and in Malaysia. Japanese investment, Japanese business, has played major roles in increasing the prosperity of this region.

Australia and Japan, as Prof. Kiki has said, work together in the East Asia Summit, where we can bed down the norms of behavior, bed down ways we can engage and discuss problems and share information, and having mechanisms like the EAS is very useful for us to at least talk about issues that arise.

One thing Australia and Japan are doing now is working with third countries. So again going back to the model, we are working with India through a Australia-

Japan-India trilateral discussion, and again we share common values with India as well.

And we are also working with the Pacific, through an Australia-Japan Pacific strategy. Japan is very active in the Pacific helping develop aid projects and provide economic and education development. Australia has been very active in the Pacific as well, and so we are sharing our information and helping on some projects where together we can better help the Pacific Island countries to develop, for example through education and environmental management.

FUKUSHIMA: Hiro, do you have any questions to raise or any points to make?

AIDA: Yes, maybe this might be something that Kiki you yourself can explain to us. I just want to talk about the kind of similarities between, how should I say, the nature of our two countries.

Japan, as you know, was the first modernizer in this region, in Asia. Japan started modernization much earlier than the other countries in East Asia. And Australia is kind of a country that is a little bit isolated from the other parts of the West geographically but still one of the Anglo-Saxon countries.

So with Australia based in the Pacific region but as one of the Western countries, one of the Anglo-Saxon countries in the region, and Japan as first modernizer in the region, that has made us rather closer in a way because both of us have a divided self, sort of. Are we a part of the West or are we a part of Asia? Actually, we are both. That is our destiny.

So both of our countries have been living these two divided selves and that is something that Kiki has been talking about a lot: the two genes of pan-Asianism and Western universal values. Of course, we should uphold those universal values, but on the other hand, we Japanese are Asians, and Australians are a country located, based, in Asia. So how does that work and mean for our cooperation? How does that help us cooperate together? That may be something Kiki can explain to us.

FUKUSHIMA: Trevor, in short, I observe Japan and Japanese foreign policy as struggling between two DNAs. One is universalism or trying to be a part of Europe

and the US. The other DNA is pan-Asianism, trying to be Asian, trying to be active in Asia and for Asia. And that struggle of the two DNAs has continued since the Meiji Restoration to World War II and then beyond, even up to now.

And as Hiro has kindly pointed out, my observation is we have to live with these two DNAs and we have to reconcile these two DNAs in forging our international relations. In the case of Australia, if you can allow me, when I was working with the Asia-Australia Institute of University of New South Wales they asked me a question whether Australia is truly a part of Asia. They asked me whether they are Asians or not and can you guess what I said?

HOLLOWAY: Yes.

FUKUSHIMA: Oh, then I don't have to explain. Well, I said that Australia, starting from a white Australian strategy has evolved into a honey-colored Australian strategy. Now, that was a question I was asked in the 1990s, but today nobody in Asia asks the question whether Australia is a part of Asia or not. Does anybody still ask that question? How do you identify yourself in Asia?

HOLLOWAY: I think very much that that sums it up well. Australia really is a very multicultural country and those of you who have been to Australia would have seen that. One in four Australians are born overseas; almost 50% of Australians either were born overseas or their parents were born overseas; there are half a million Australians, or 2% to 3% of the population, who were born in China and 5% of the population has Chinese ancestry. So it really is a very multicultural country.

And I think as globalization continues it's harder to pigeonhole countries in certain areas as the power balance moves and the region becomes closer. It becomes much less of an issue of how do you identify yourself and rather look at the norms of your behavior.

So for us, we look at the Indo-Pacific region. Nine of our top 10 trading partners are in that region: our major ally, the US, is part of that region; a major partner in a lot of areas, Japan; India, a large Australia partner; China; and so for us that encapsulates

our sort of focal point.

FUKUSHIMA: Right. I studied multiculturalism in Australia at one time and I was quite impressed. It is amazing that one out of four are of foreign country origin. It's really amazing. The name of this school is 地球社会共生学部, and when it comes to 共生 it is a very important for us to study, how people can live together in an intercultural context.

Well, Trevor, you have asked a question to the students in your lecture, namely 世界観, the worldview of the students here, so shall we open the floor and invite the students to join in our conversation?

それでは、ここから学生みなさんに質問していただいたり、意見をおっしゃっていただきたいと思います。まず最初に、トレバーさんが講演の中で皆さんに世界観を説明されました。みなさんはホロウエイさんの世界観をどう思いますか。みなさんの世界観はなんですかということも聞かれましたので、それにまず答えて下さる方に手を挙げていただきましょう。

HOLLOWAY: We could change the question and say whom do you see as the top two or three partners for Japan in what Japan does? For Australia, we identify five key partners, US, Japan, India, China, and Indonesia, and we have reasons why we focus on these five countries. Which are the most important two or three countries for Japan?

FUKUSHIMA: 世界観が難しそうなので、ちょっと質問をかえましょうか。みなさん、日本にとって最も大事なパートナー国を二つ、もしくは三つあげてください。オーストラリアの場合は、五つあげられましたね、アメリカ、日本、インド、中国、インドネシア。それぞれ理由があってこの五つがオーストラリアにとっては、重要なパートナーだそうです。日本にとっての重要なパートナーを二つか三つあげてください。

質問がぐっと答えやすくなりましたので、ぜひ何人か複数の方に答えていただきましょう。手を上げてください。はい、お願いします。

STUDENT1: 私と思うのは、日本は今、アメリカとあと中国と、あと私たちがたぶんこうやって勉強しているからだと思うのですが、東南アジアに日本は目

を向けていると思っていて、さきほど話して下さるまでオーストラリアのことをちゃんと思いつかなかったのですが、こうやって講演を聴いていろいろな話を聞いているうちに、そういえばスーパーでお肉を売ってた時にオーストラリア産だとか、友達が留学する先はみなオーストラリアだなというのを思い出したので、講演を聴いて今考えるとオーストラリアも重要な位置に含まれているのかと思います。

FUKUSHIMA: ありがとうございます。今日この講義と鼎談をしてよかったですね。オーストラリアが重要なパートナーに入ったという認識だそうですが、ほかにいかがですか。2、3人意見を聞きましょう。どうぞ。お願いします。

STUDENT2: 僕は中国とロシアだと思っていて、逆に質問なんですけど、前アボット政権が日本と非常に仲が良かったのですが、ターンブル政権に変わってちょっと距離があるなとか、親中派だなと思って、先日潜水艦事業が4兆円規模で話題になったじゃないですか。そのあたりを現場レベルでどう考えているのかというのを、ちょっとお話をうかがいたいと思います。

FUKUSHIMA: なぜ、中国とロシアが重要なパートナーなのでしょう。なぜ？

STUDENT2: アメリカの政府がすごく落ちてきているので、中国が今輸出入が一位じゃないですか。なおかつロシアとは領土問題が残っているので、そのへん関係を改善していくことが必要なんじゃないかという認識です。

FUKUSHIMA: ありがとうございます。潜水艦問題を答えていただきますが、その前にもう一人ぐらい日本にとって重要なパートナーはどこの国かという質問に答えていただきましょう。はい、お願いします。

STUDENT3: まずこの地球社会共生学部なので東南アジアとインド。僕自身、ガンディの思想に影響を受けていて、それで共生を考えると、なんだろう、お互いを許し合うとか認めあうというのが大事なと思って、あと質問なんですけど。積極的平和主義って言ってたじゃないですか。具体的に何をしているのですか。何するのですか。

FUKUSHIMA: それは日本の話ですね。オーストラリアの方に…じゃあ、ちょっと質問を工夫してお聞きすることにしましょう。オーストラリアから見て、日

本が積極的平和主義で何をやってると見えるかという質問にしていいいですか。

AUDIENCE 3: はい、そうです。

FUKUSHIMA: それではそうしましょう。他に日本にとって重要なパートナーについて発言をしたい人はいませんか。大丈夫ですか。それではホロウエイ参事官お願いします。

Trevor, you have heard responses from students and if you have any reactions please do make one. The second question is what is the impact of the changeover of your government on Japan-Australia relations, including the question of the subs. And the third question was how do you perceive the Japanese foreign policy, defense policy, of proactive contribution to peace from Australian eyes? So there are three questions.

HOLLOWAY: 今、みなさんが挙げた、中国やロシア、東南アジアなどの国が最も重要だと思われることはとても面白いと思います。

潜水艦の話になりますと、オーストラリアは先週、次期潜水艦共同開発計画の選定を発表しましたが、フランスが選ばれました。オーストラリアの場合、特定の要件がありましたので、フランスとドイツと日本の提案内容を評価した結果、最もオーストラリアの要件に見合うと思われたものがフランスの提案であると評価されました。しかしながら、オーストラリアと日本の二国関係のコミットメントに影響はありません。

首相の交代という質問に関しては、振り返ってみますと長年にわたってオーストラリアは、政権にかかわらず、いつも日本と密接な関係を築いて来ました。日本との関係は、貿易であれ、防衛、政治的、戦略的にも、政権が交代してもあまり変わらないと思います。なぜならば共通した価値観を共有しているからです。

FUKUSHIMA: Proactive contribution to peace.

HOLLOWAY: It's a very good question. I think Japan is very, very active throughout the whole region. Japan's aid program has been very, very thorough for decades all over Asia-Pacific and perhaps that's not well recognized in Japan itself, but when you go to Thailand and when you go to Malaysia and when you go to Cambodia you

will see how Japan has contributed to that region. You will see specific examples of education programs; health programs; infrastructure such as hospitals, roads, bridges; and governance programs.

本当に数えきれないほど、多くの例があります。日本は数十年間にわたって、主に開発援助を通して東南アジアの国々に協力しています。

And also with Japanese corporate investment in all of those countries you will see very, very close corporate relationships, government relationships, and aid relationships throughout the region. So I think that has been a very positive peaceful contribution to development.

KIKI: Right, thank you. National security strategy includes diplomacy, defense, and development and we fully recognize that.

まだ、興味は尽きませんが、終了時刻が迫っており、マイクを平澤先生にお返ししなければなりません。ここでホロウエイ参事官、会田教授に感謝を申し上げて鼎談を終わりたいと思います。

Why don't we thank Trevor and Hiro and close our part of the program and turn the microphone back to Dean Hirasawa? Would you please thank Trevor and Hiro for their contribution to this morning's lecture? Thank you very much.

では平澤先生お願いいたします。

HIRASAWA: Mr. Holloway, thank you very much. The lecture was very wonderful. Your lecture was not hollow but filled with many interesting ideas, for example, democracy, freedom, and a peaceful coexistence with common values and worldview.

(拍手)

(了)